

人の研究は言語の方を度外視した観があるけれども、實はそうではないのである。重の廣東音は *Chung* 福建音は *tüung, täung*, 寧波音は *djung* であつて、*saug, sung* の如く柔らかな音を出しながら、サンガールは今日でこそ *sangar* と歐洲語に書かるゝが、土音は如何であるか、又古代にては *chung* 等に近しい音であつたのが、今は柔かく歐洲風に訛られたか、是等は實に疑問である、又航海者は之を高螺と稱し、或は加羅など、略されて居る所からして見ると、重を省いても通用したるらしく、此重はジャバ語 *ujung* (岬) であつて、本來は *Ujonggar* と呼ばれたのが、*Jonggar* となり、今では *Saugar* となつたてはないかとも想像するのである、然し之も單に想像に過ぎないのである、又支那人として正確に地名を發音せず訛つて居る例は澤山ある、斯くの如く文字の上から云ふと種々の推想説が起るが、何れにしても想像に過ぎないから、吾人の此研究では言語上の立證をわざと避けて、單に方角の上から、地理の上から論定したのである。

- 註 (一) *Groeneveldt, Notes on the Malay Archipelago & Malacca*, (Batavia, 1876) p. 57. & 58.
(二) *Schlegel, Geographical Notes*, VI. in "T'oung Pau", (vol. IX, Leide 1886.) p.p. 368-370.
(三) *Johannes Müller, Beschreibung der Insel Jav.*, Berlin 1865. p. 261 & 262.

附記

指南針の戊巳を略せる事に就いて、鹽谷溫君の教示さるゝ處あり、戊巳は五行説に従へば土に配し、土は方位にては中央に位す、故に戊巳は中央にあるものとして指南針に略せるものなるべしと、予輩は實に此見解に服す、此處まで予輩は思ひ至らざりしなり、又同君は『古文彙刊』第四、五秩に沈子培の『島夷志略廣證』ありて、重迦羅の條に今の地圖を按ずればサンガールに當るべしの註あるを示さる、先進既に此解あり今更に論證を要せざるに似たり、又迦をガに發音することに就いては高桑駒吉君の注意さるゝ處ありしが、堀謙徳君はサンスクリットにも例ありとして鳥の名 *Burda* を迦樓羅と書き其他かゝる例影からずと教示されたり、又大谷勝眞君は重迦羅の發音に就いて有益なる助言を與へられたり、附記して諸君の好意を感謝す。

校正に際して

柴 謙太郎 記す

支那古代貨幣の源流を徵證

すべき一二の資料

附本邦古代の刀劍の原流

古 谷 清

支那古代の貨幣を分類せば、刀、布、貝貨、圓錢にな

して、別に蟻鼻錢、藕心錢など稱するものあり。此中蟻鼻錢は、近時の研究に徴すれば、貝貨と圓錢との中間を繋ぐものなりと云ふ。

東洋學報二卷二號濱田文學士の支那古代の貝貨に就て

照而して、刀、布、貝貨の如きは、明らかに物品交換時代の遺風の思想が全く離脱せざるを表示せるものにして、其中刀貨には、尖首刀、圓首刀の二種あり。

たゞ其銘に明、齊、即墨等の文字あるより、又明刀、齊刀、即墨刀なども稱する也。又布には、方足、圓足、尖足及び鍔布或は空首布と稱せらるゝ種類あり。

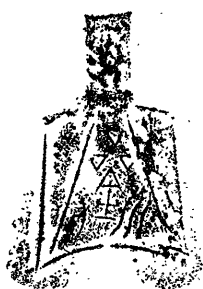
且つ此の刀布の二種は周末より春秋戰國時代に涉り行はれたるもの也と云はるゝもの、又貝貨は羅振玉氏の説には、周以前商代のものと云はる。蟻鼻錢が、貝貨と圓貨との中間を繋ぐもの也との説あることは、既に述べたところ也。又圓錢に就いては、遠く貝貨に起原を有せりとの説あると同時に、一説に刀貨の柄端に存せる圓形有孔の部分より發達せりとも云はる。

されば今如上の支那古代貨幣の源流に就いて、一々これが起原を徵證研究すべきとは、唯に錢貨學上の重要な問題なるのみならず、又史學考古學上必要なる研究問題たる也。其問題一見小なるが如くなれども、又必ずしも然らざるものならむ、固より余輩の如き門外者の容易に知る可からざるところなり。唯余輩が以下記述せむと欲する。支那古代貨幣の源流を徵證すべき一二の資料と稱するは、支那古代の貨幣中、刀、布、布にありては特に空首布の起原に就いて、新に其資料の増加を報告せむとするにあり。

抑も支那古代の貨幣中、刀貨は實用の刀を模したるものなると、

第一

圖

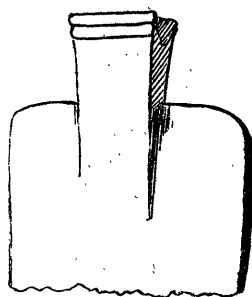


又空首布は農具中の鋤の形を模したるものなるべしとは、既に

先輩の説ありて又た再びこれを繰り返すの必要無き

也。第一圖は空首布中の一種にして、表面の文字は、齊川金化と讀み得らるゝもの山東省臨淄の發掘なりと云ふ、これと同形の鐵製の鋤と思はるゝもの、近時

第二圖



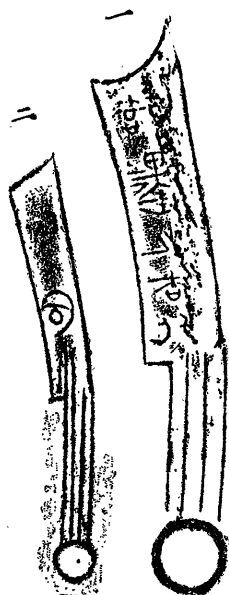
新たに支那より將來せられ、東京帝室博物館の藏に歸したるものあり、即ち第二圖に示したる

もの之れなり。高さ三寸六分、刃部の幅三寸二分、一に鋤と稱するものなりと云ふ。錢田器なりとあれば、其鋤と稱すとも又錢を稱すとも、共に農具たるに相違無き也。或は餘りに其形小なるより、實用品に非らずやと疑はるゝなきに非らざる可けれど、我上古の古墳墓中より發掘せらるゝ農具鋤中にも、これ等と餘りに懸隔なき大さのものあり。然かも其特に鐵製なるより推考せば、必ずしも模造とは考へら

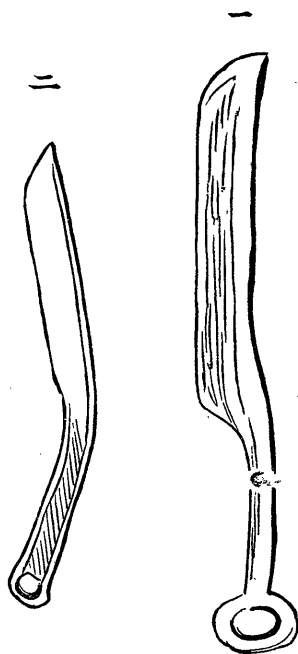
れず、殊に我上古の世に於いて、これ等の實用器具を模造して、埋沒せし場合は、同一の材料を使用せずして、滑石を以て造れるが多し。且つ時間と勞力を吝まざりし時代の狀態と、時間と勞力を吝む現時の狀態より推して、事を斷定せむと欲するは、正當なる解釋には非らざるべし。第二圖の鐵製鋤に柄を附したる形と、第一圖の空首布に柄を附したる形とを想像し見たらむには、何人も其同一なるに異議なかるべし。李佐賢の古泉滙の時代に於いては、空首布上部の空所を解して、柄を附し市に持ち行くに便せむ爲となし、貨布文字考又其携帯に便せむ爲なりと解したり。然るに發掘せられたる空首布を見るに多く否其殆全部が、鑄造當時の燒土の充實し居る儘なるを見れば、其空所が必ずしも物を挿入して携帯に便せし爲に非らざる事明らかにして、其據りし源流品に、此種の必用部分ありしを、其儘模せしが爲なりとは、先輩の既に認定せらるゝところ也。而し

て爰に更らに如上鐵製鋤に關聯して思ひ浮ぶは、我
上代の墳墓中より發掘せらるゝ
斧に就て也。古墳發掘の斧中に
は、石製と鐵製とあり。其石製
の分は鐵製實用品の模造也とは
考古學者間の定説也。而して其
鐵製斧と稱せらるゝものゝ中に
は、餘程第二圖のそれに近き類

第 三 圖



似のものあり。これ等も通例單に斧と呼び居れども、
或はこれ等は一種の農具否其鋤の類には非らざるな



第 四 圖

に第三圖に示したるは刀貨にして、其一是尖刀の部
に屬すべき即墨刀の拓本也。文に即墨之去化とあり。
其二是明刀にして、銘に明とあり、此刀貨も又空首
布の如く、實用のそれより變化し來りし事既に言へ
るが如し。然るに又近時刀貨の源流を偲ぶべき、古
代銅製及鐵製の實用遺品の支那より將來あり、共に
又博物館の有に歸せり。第四圖の一二は其銅製品に
して、一は長七寸一分、二は長五寸五分、又第五圖
の一二は鐵製品にして、一は長三尺六寸六分、二は

長九寸七分、而して刀貨の柄端に圓形の有孔を存せるは、其實用刀の柄端に環を模したるもの也。其實用刀の柄端に環あることは、何の必要に出てたるも

第五圖



のなるべきか、武梁祠の石刻畫像を一見すれば直ちに解釋し得らるべし。第六圖は武梁祠石刻畫像中の

一部也。

第六圖



右手に握れるは環頭式刀にして、左手にさゝゆるは楯

なるべし。環頭式刀の環より垂下せる二條のものには、絹帛等を以てしたる裝飾なるべし。而して此裝

説
林

飾は一面に於いて單に裝飾たりしと同時に、一面に於いては別に用途の存せしものなるべきか、さて刀貨の場合に於ける有孔は、從來先輩の所説に徴すれば、此孔に紐を通じて、携帶に便せしものと云はる、尙刀貨の形式を一見するに、何れも刃部に向つて、多少の屈曲あることは誰人も氣付らるゝところ也。然るに其銅製の實用品及鐵製のそれに於いても、又其形式を存するを見る也。これ其實用上何等の便宜ありしが爲なるべきか、我邦源平時代より其風潮を見たる、刀背に向つて、反あるものは甚だ異なるを覺ゆる也。今刀貨に就いて記述せし序を以て、以下更に我が上代の刀劔と支那のそれとの關係につき特に其環頭式の分に關し、余輩の知れる事項を記述して、研究者の參考に供せむと欲す。

我邦上古の古墳墓中より發掘せらるゝ、刀劔就中其刀片者双中には、支那古代のそれと同じく柄端に環を有せるものあり。但し此環には其環中に、或は雙

龍珠玉を銜める狀を表はしたるもの、或は鳥獸首の飾りあるもの、或はそれ等の甚だしく模様化したるもの、又或は幾何學的模様を以てせるもの、或又三環を相接したるものあり。而して單に環のみの場合には、刀身と同じく鐵を以てこれを作り刀身に連結鍛鍊せり。然るに環中に種々の模様を表はしたるは環頭のみ銅を以て鑄造し之れに鍍金をなしたり。萬葉集に『伯劍わさみが原』又『高麗劍わがかげゆゑ』などある。伯劍とは我古墳墓發掘の環頭式刀を云へるものなりと云ふ。即ちコマツルギと云へる枕詞に、ワと云へる語を接續せる點に注意せらるべし、此の場合ワは輪を連想せらるべく、且つ東大寺獻物帳に『銀莊高麗樣大刀』とある注書に、『銀作環頭』と書し、又鮫皮裏把環頭』とある記事等より察して、環頭式刀の伯劍に相當すべきものなるべしとは、考古學者間の定説也。且つ其伯劍又高麗劍と云へるは、朝鮮半島否其高勾麗より傳へられたるによりかゝる名

稱の附せられたるなるべしと云はる。以上主として高橋氏鑄と録と玉に而してよしや其環頭式刀が高勾麗より傳へられたにもせよ、其起原地は半島に非らずして、遠く支那なるべきは、刀貨及武梁祠石刻に其傳を傳へ、加ふるに史籍又其傳へあるに依り。從來既に其起原地の支那なるべしと考へ居たり。半島にては先年關野博士の一行は大同江畔に於いて、此種の形式の刀身を古代の墳墓中より發掘せられ、同じ頃萩野博士の一行に加はられたる今西文學士も同所に於いて、同様の刀身殘片を得られたるやに記憶せり。近くは本年白島博士の視察せられたる晋州の古墳中よりも發掘せられたり。然るに従來獨り支那内地に於いて發掘せられたる、鐵製實用の此種の刀身を見る事能はざりしが、今回其遺品の將來せられ初めてこれを見るを得たり。余の實見せるは大小凡て九本、中兩刃のもの一本、之を除けば他八本は片刃のものなりとす。第五圖に示したるは、其八本中の二一なり。

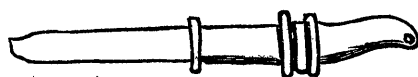
何れも大體に於て、我邦古代の墳墓中より出づるものと大差なし。唯異なれるは刃部に向て多少屈曲せる一事也。これ我邦發掘のそれが眞直なるとは其趣きを異にせるものと云ふべし。余輩は朝鮮發掘のそれに就ては、未だ多くを見るの便宜を有せざれば、これに就て云々する事能はざるも、實見したる數種の分は矢張我邦のその如く眞直なりしと記憶せり。若しも然らむには、我邦の環頭式刀を高麗劔と呼ぶの、又間接に於いて其半島經由を實證し得らるべし。然しこれ未だ未決の問題也。尙爰に一言附記し置くべき必要あるは、今回支那將來の環頭式刀には、我邦發掘のそれに見ゆるが如き、環中に種々の裝飾あるものは見當らず、唯單に刀身と同一の鐵材を以て作られたる環のみ也。且支那に於て從來我邦發掘のその如く、環中に裝飾を施したるもの、見ありしや否を知らざるも、唐六典卷十六兩京武庫署の條に、

釋名曰、刀末曰鋒、其本曰環。今儀刀蓋古班劔之類、晉宋已來謂之御刀、後魏曰長刀、皆施龍鳳環、至隋謂之儀刀、云々

又晉書に

赫連勃勃、造百鍊剛刀、爲龍雀大環、號大夏龍雀。などの上の記事あるより察するに、環中に裝飾を施せしものなりしを察し得らるゝ也。殊に我邦のそれを見るに、正しく支那傳來に非らざる可からざるを察し得らるべければ也。從てこれも亦支那に其起原を有するものたるや明らか也。而して其環のみと更らに環中に裝飾の加はりたると、其何れか早く何れか後の起原なるやは、余輩の別に説明を要する迄もなけむ。尙終りに望み環頭式刀の極東に於ける分布と其他二三これに關して述べ置きたき事ある也。先づ此刀の極東に於ける分布は、余輩精細に調査せしに非らざるも、支那其起原地の状態をなし、朝鮮日本共其古代に其鐵製のもの行はれたる事に就ては、

既に述べたるが如し。獨人ペー、ライネツケ氏の支那及スキート西伯利亞種族の一二の考古的關係を述べられたる著書に従へば、此種の青銅製小刀の西伯利亞に於て發掘せられ、スキート種族に使用せられたるを云へり。博物館陳列の暹羅の現用武器中に、又環頭式刀あるを見る也。尙此環頭式刀と相關連して調べたきは、世に所謂廠手の刀なりとす。廠手の刀と稱するは、第七圖に示したるが如く、其柄手の末端が早廠の形狀をなせるより稱するもの也。我邦に於いては、奈良正倉院の御物中に此式の刀の遺存する



第七圖

あり、又識者の研究に従はゞ我古代の墳墓中よりも掘り出され、其使用の時代に就いては、上史より奈良朝を経て平安初期に及ぶと云はる。此刀固より我

邦の創始には非らず海外恐らく支那よりの輸入なるべし。印度サンチの彫書中にも、同形の刀の刻されあり、W. Engerton, The Handbook of Indian Arms 更らに亦希臘ミケーネの墳墓發掘品中にも、青銅製の此種の屠刀あり Burton, The Book of the Sword, 而して更らに其起原は埃及なるべしと稱せらる。今一つ此の環頭式刀に關し紹介し置きたきは、肥前五島七郎宮所傳の古刀也。此古刀に就いては、夙に藤貞幹の集古圖中に描かれてよく識者間に知らるゝところ、其物果して今日にもよく傳へらるゝや否を知らざるも、貞幹の集古圖には割合によく詳細に其形を書きあり。今其圖に就いてこれを見るに、固より日本の製品とは思はれず、何れ外國傳來品たるに相違なかるべし。朝鮮に於いては後世迄環頭式刀を有せし事は、高麗史の記事に徴し知ることを得べし。余輩集古圖の七郎宮所傳の古刀圖を見る毎に、或は倭寇などの半島より將來せしものには非ずやと

も考へたり。然れども未だ其實物を見るの機なきを以て、果して然るや否を確かむる事能はざるを憾む。以上述べ來れるところは、單に資料の報文也。其果して然るや否に就ては識者の研究と教とを希望するところ也。(完)

法顯の行路 (下の1)

堀 謙 徳

第七 拘薩羅より摩竭提に至る

法顯は沙祇國より拘薩羅國 (Kosala) に入り、首府舍衛城 (Śrāvastī) に到る。この舍衛城の位置に就ては、異說少なからず、スミス氏は『西域記』卷五に轉索迦國より室羅伐悉底國 (即ち舍衛城) に至る距離を指定して東北五百餘里 (約八十三哩) となせる

を見て、法顯の指定せる沙祇・拘薩羅の距離「南行八由延」を改めて「東北行十八由延」となし、前回に之を引用せり。然るに、『マハーワツガ』(Mahāvagga, VII. 1. 1.) に沙祇多より拘薩羅まで六由旬 (約四十二哩) とし、『摩訶僧祇律』卷十一には、優波離の指定として二日間の行程となせり。カニンハム氏は法顯の八由延 (約五十六哩) を東北に進みたりと解釋し、ラーフチ川の南岸サーヘト・マーヘト (Sāhet Mahet) を以て古の舍衛城となせり (Archaeological Survey, Report, I. 330)。この説は舊說なれども近頃種々の新資料を發掘したる結果、學者多くこの説を採るに至れり。この地は佛陀が久しく留りし由緒もあり、古に佛教盛大にして波斯匿王・須達長者・毗舍佉の如き信者もあり、史上の事實多くこの地に演ぜらる。法顯時代には市街僅に二百餘家の遺存するを見たりといへば、衰頹の狀想見するに足れり。

法顯は舍衛城滞在中、佛蹟を巡拜したり。祇園 (祇